

格成分の説明の予測 —予測の読みの一側面—

石黒 圭

要旨

格成分の説明の予測は概略、格成分の形態から義務的に生じる予測、格成分の意味から生じる予測の二つに分かれる。前者は以下の①～④のように、後者は⑤～⑧のようにそれぞれ整理することができる。

- ①思考・伝達動詞に典型的に見られるように、必須格成分が省略されているとき。
- ②格成分に「何」「誰」「どこ」「いつ」「どのような～」といった不定語がくるとき。
- ③格成分に、文脈指示の指示語が来て、なおかつそれが先行文脈と照応していないとき。
- ④格成分に、ノ格を必要とし、なおかつそのノ格を欠く名詞がくるとき。
- ⑤格成分に、概括的または類的な把握を表す、具体性に乏しい表現がくるとき。
- ⑥格成分に、読み手にとってなじみがない難解な表現が来るとき。
- ⑦格成分に、たとえられるものを欠いた比喩性を帯びた表現が来るとき。
- ⑧格成分に、誰なのか、または何なのか、特定を必要とする表現が来るとき。

また、後者、すなわち⑤～⑧に関して、当該の名詞の意味を強めたり、不定性を高めたりするような修飾語がその名詞の前についたり、当該の文が、存在文や出現文、分裂文など、ある格成分を焦点化するような構文を取ったりすることで、読み手の予測に対する意識がさらに強化されることがある。

キーワード 格成分、予測、形態、意味、強化

1. はじめに

格成分の説明の予測とは、当該文¹全体ではなく、当該文の一部の要素の内容が不明確であるときに、その不明確さを補う説明が後続文に来ることを読み手が予想する予測のことである。文の一部の要素といっても、述部の内容が不明確な場合、文全体の意味が不明確であることにつながるの、それは句の説明の予測として別に扱うことにし²、本稿では、典型的には「名詞プラス助詞」で表されるような、格成分に関わる予測を扱うことにする。

格という用語は、英語の case、つまり箱に相当するが、この格成分の説明の予測も、箱のイメージでとらえるとわかりやすい。

まず、箱そのものは表現されていないが、箱が本来存在するということが述語からわかるタイプのものがある。読み手は述語から箱、すなわち格成分の存在を認識し、その箱の中身を予測することになる。このような予測は、必須格成分が省略されることによって起こると考えられる。

(1) 二人きりの観覧車の中で、彼女が突然（【 ϕ 】を）切り出した。別れ話だった。

(1)において、当該文だけでは彼女が「何を」切り出したのかわからないため、読み手は

¹ 読み手が今読んで理解している文のこと。また、この当該文の前にある、読み手がすでに読んだ文を先行文、当該文の後にある、読み手がこれから読む文を後続文とする。

² 石黒（1996）では、後続文の予測を、当該文との接続関係から、理由、句の説明、格成分の説明、結果、逆接、並立の六つに類型化して考察している。理由の予測については石黒（1998a）を、句の説明の予測については石黒（2001）を、逆接の予測については石黒（1998b）を、並立の予測については石黒（1999）を、それぞれ参照のこと。

後続文にその内容を求めていくことになる。そうした理解は、「切り出す」が持っているはずの必須格成分が欠けており、それが先行文脈からは補えないために起こると考えられる。

次に、箱そのものは提示されるが、箱の中身がわからないもの、いわば箱の中身が「？」で示されているものがある。このようなタイプの予測は不定語によって構成される。不定語を含む当該文は、(2)のように疑問文のこともあるし、(3)のように疑問文でないこともある。

(2) 「ポケットの中に【何】が入っているの？」「鍵だよ」

(3) その男のポケットの中には【何か】が入っていた。隠し金庫の鍵だった。

同様に、箱そのものは提示されるが、箱の中身がわからないものに指示語がある。ただ、指示語の場合、不定語の場合と異なり、箱の中身が「？」ではなく矢印で示されていると考えることができる。その矢印が「←」を向いている場合は前方照応であり、箱の中身は先行文脈と結びつけて理解されるため、予測とは関わらない。予測と関わるのは矢印が(4)のように「→」を向いている場合、つまり先行文脈によって指示語の内容が補えない場合である。

(4) 姉は私のほうを向いた瞬間、【こう】言い放った。「社会の窓が開いているよ」

また、ある名詞が示されたとき、その名詞を修飾するノ格がないと理解が不十分になってしまうものがある。たとえば(5)では「何の」チケットであるかが問題となっている。

(5) きのう上司から「奥さんと一緒に行きなさい」と【チケット】を二枚渡された。見ると、東京ドームの巨人・阪神戦のチケットだった。

本稿では(5)の「チケット」のような格成分を、大きくとらえるために属性主を欠く表現と呼ぶことにするが、庵(1995)(1997)のいう1項名詞にほぼ相当すると考えられる。

(1)~(5)に見られる格成分は、省略、不定語、指示語、1項名詞といった箱の持つ形態的な性格上、必然的に予測を生み出すものであるが、箱に1項名詞でない普通名詞のラベルが貼られている格成分は、そのラベルの意味によって箱の中身が喚起されるため、予測は起こらないのがふつうである。ただ、その意味の抽象度が高い場合、中身の見当がつかず、後続文でその具体的な内容を説明する必要が生じ、格成分の説明の予測が喚起されることがある。

(6) この種の大型車には【重大な欠陥】がある。燃費が極端に悪いのである。

「欠陥」にはいろいろあり、それがどんな欠陥かが問題となる。「重大な」という修飾語がついても、その欠陥の程度が示されるだけで、欠陥の具体的な内容が示されるわけではない。したがって読み手は、後続文にその欠陥の具体的な内容が示されることを期待し、次を読み進めることになる。「重大な欠陥」のようなものをここでは具体性に乏しい表現と名付けておく。

具体性に乏しい表現が格成分の意味によって予測を誘発する代表的なものであるが、この具体性に乏しい表現以外にも、意味の上から格成分の説明の予測を誘発するものが三つ

ある。難解な表現と比喩性を帯びた表現、特定を必要とする表現である。

難解な表現は、読み手にとってなじみが低く、また難しい表現であるため、書き手による補足説明が必要となるようなものである。たとえば、(7)の「リアスポイラー」という語は、車に詳しい読者ならわかるかもしれないが、一般の読者にはわかりにくく、後続文でその意味が説明されることが予想される。

(7) 友人の新車には【リアスポイラー】がついていた。リアスポイラーは高速走行の際、車を安定させるために車体の後部についている翼のようなものであるが、友人はその新車でカーレースに出るつもりらしかった。

比喩性を帯びた表現は、難しい表現ではないが、その表現が指し示す意味が字義通りの意味でないことが文脈からわかるものである。(8)では「蛇」の正体が何であるか、後続文で明かされることが期待される。

(8) 今朝僕は混雑した電車の中でとうとう【蛇】と口論した。蛇は、毎朝僕と同じ電車の同じ車両に乗ってくる、蛇のように目つきの悪い中年のサラリーマンだ。

特定を必要とする表現は、当該の名詞が「どんな」名詞かではなく、名詞そのものが「誰」であるのか、または「何」であるのか、その特定が必要になるものである。(9)の場合、「私の肩を後ろからポンポンとたたいた人」が誰なのか、後続文でその人物が特定されることが期待される。

(9) 【私の肩を後ろからポンポンとたたいた人】がいた。振り返ってみると、小学校時代の親友がニコニコしながら立っていた。

以上をまとめると、格成分の説明の予測は大きくは二つに分けることができる。一つは格成分の形態から義務的に生じる予測であって、その格成分には、省略、不定語、指示語、属性主を欠く表現の4種類がある。もう一つは格成分の意味から生じる予測であって、具体性に乏しい表現、難解な表現、比喩性を帯びた表現、特定を必要とする表現の4種類に分かれる。前者については3章で、後者については4章で、それぞれ詳しく見ていくことにしたい。

2. 方法と資料

本稿は、連文論研究の一環であるため、理解の単位は文とし、方法はこれまでの拙稿(石黒 1996, 1998a, 1998b, 1999, 2001) に準じる。すなわち、

- ① 冒頭の1文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ② 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときはそれを記録する。
- ↓
- ①' 冒頭の1文(=先行文)の内容は既に頭に入っている。
- ②' 冒頭文の次の文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。

③' 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときはそれを記録する。という作業を、1文ずつ文章の結末まで繰り返すものとする。その中で、当該文の一部である格成分の意味が何らかの意味で不明確であるために起こった予測を集めて整理したものが3章、4章の内容になる。

なお、資料には『世界』主要論文選、『何とも知れない未来に』を用いた。前者は主に社会を対象に書かれた論文集、後者は原爆小説の短編集である。予測は、論説文か描写文かによって、また、書き手の個性によって、結果が大幅に変わってくることが予想される。そのため、論説文のアンソロジー、描写文のアンソロジーを選び、資料にバリエーションを持たせるように心がけた。

3. 格成分の形態から生じる予測

3.1 省略

必須格成分の省略が原因で予測を引き起こす例は、思考・伝達動詞に多い。資料に当たって見た範囲だけでも、「思う」「考える」「言う」「話す」といった頻繁に用いられるものの他、「思い出す」「夢みる」「憶える」「聞く」「耳を傾ける」「語る」「述べる」「言い出す」「答える」「頼む」「願う」「願う」「問う」「質問する」「聞き出す」「呼ぶ」「呼びかける」「叫ぶ」「反対する」など、多岐にわたっている。思考・伝達動詞は、「思う」「考える」「言う」「話す」のような広範囲の思考・伝達活動を表す動詞に典型的に表れているように、思考・伝達の対象となる内容と、思考・伝達行為そのものとの意味的つながりが他の動詞に比べて弱く、相互の自由度が相対的に高いため、思考・伝達内容と思考・伝達行為とを切り離して使いやすいのであろう。また、思考・伝達行為に思考・伝達内容を後続させることで、後から出てくる思考、伝達内容に注目させるという表現効果も担うことにもなる。思考・伝達動詞においては、内容を表すヲ格、ないしは引用を表すト格が省略されている。

(10) ふと私は（〔φ〕を）思い出した。それは誰からきいた話か思い出せない。それとも誰かの書いた物語の一部であったかもわからない。しかし私の思い出したのは濃艶なカキツバタの花である。（何 56 頁）

(11) あるとき、ある学生が私に（〔φ〕と）語った。
「私の知らないことばかりでおもしろい。昔の歴史という感じね」（世 763 頁）
もちろん、思考・伝達動詞以外の動詞でも予測を引き起こすような省略することは可能であるが、その数は比較的少なく、そのような省略が行われたときは必ずと言っていいほど、その省略された要素に注目させるような表現効果を帯びている。

(12) おさきにごちそうさま、という少年の声がした。台所へ通じるらしい潜りの暖簾から出て来た少年が、登美子に向かって頭を下げていた。
（〔φ〕に）似ている、と阿紀は思った。

一瞬とまどい、そしてはにかむ少年の顔、それは待ち合せの時間に遅れてやって来た時、昇のよく見せる顔だった。 (何 230 頁)

3.2 不定語

不定語が予測を引き起こすというのはきわめて当然のことである。そもそも不定語は、わからない部分を仮に埋めておいて、そのわからない部分を後で示す役割を果たすものだからである。ただし、対話を中心とした話しことばや、小説中の会話文とは異なり、説明を中心とした書きことばにおいては、不定語はかなり修辭的に用いられる。つまり、文章全体にわたる問題提起など、不定語が、読み手の注意をひくために疑問を設定する設疑文として用いられるのである。「何」「誰」「どこ」「いつ」³といったものの他、「どのような～」のような複合形もよく用いられる。

(13) 内村を「戦闘の人」とみるとして、彼は【何】と戦ったのであろうか。矢内原は上記「内村鑑三の十の戦い」と題する講演の中で、社会との戦いを五つあげたあと、「社会の目に見えないところで、先生の心の戦いがあった」として、罪に対する戦い、誤解と迫害に対する戦い、家庭生活に於ける戦い、貧困との戦い、および病氣と死に対する戦いの五つをあげている。 (世 867 頁)

ただし、不定語を含む当該文が疑問文ではない場合、読み手の注意を強くひくことを狙ったものではない。むしろ、読み手の視点が書き手の視点と同化する中で、読み手が「なんだろう」と感じるくらいの軽い疑問である。

(14) 医師は机のうえに白い紙をひろげた。鉛筆をにぎって、【なにか】書きだした。と
おくに白い城の絵を描いた。城の絵の肩に「師団司令部」と書いた。 (何 122 頁)

3.3 指示語

予測を引き起こす後方照応の指示語は、コ系の指示語が多い。

(15) 志村さんは続けて【こう】教えてくれた。この桜色は、一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮をもらってきて染めると、こんな、上気したような、えもいわれぬ色が取出せるのだ、と。 (世 791 頁)

書き手の記憶を想起するときにはア系の指示語が用いられる。ちなみに、予測を引き起こすソ系の指示語は、調べた資料の範囲内では現れなかった。

(16) 【あれ】は、警戒警報が解除になって間もなくのことであった。ピカッと光ったものがあり、マグネシウムを燃すようなシューツという軽い音とともに一瞬さつと足もとが回転し、{中略}それはまるで魔術のようであった、と妹は戦^{もの}きながら語るのであった。 (何 24 頁)

また、「次」「以下」「以降」といった語も指示語と同様の働きをする。

³ 「なぜ」については、理由の予測を扱った石黒 (1998a) を参照のこと。

- (17) 少なくとも、この『ヴェーダ』の考えをもう少し類推作用によって押しひろげ、適用範囲を拡げてみると、【次のようなこと】が言えよう。つまり、目に見えるもの、聞えるものの世界は、それだけでは決して世界のすべてではないということである。(世787頁)

3.4 属性主を欠く表現

1章ですでに述べたように、本節で見る「属性主を欠く表現」は、問題となっている名詞の「何の」ないしは「誰の」部分を欠いているものであり、庵(1995)(1997)のいう1項名詞にほぼ対応するものである。

現実の文章の中で、属性主、すなわちある名詞を限定するノ格を欠く表現は少ない。表出されていない場合であっても、文脈から推測できる場合がほとんどである。属性主を欠く表現は、読み手に「何のことなのだろう」「誰のものなのだろう」ということを想像させるために、大切な情報を敢えて後から提示するもので、本来の情報の提示順序から外れたかなり修辞色の濃いものである。

実際の用例の中では、問題となる属性主は、事物や事態ではなく、人物であることが多い。人物のほうが、情報の重要度が高いことが多いため、強調の対象になりやすいからであろう。人物が属性主である場合、底の名詞には「笑い」「死」「死体」「追悼会」「声」「頭」「足」などが来ていた。また、事物、事態では「会場」「データ」「カード」など、属性主にテーマや対象を欠く例が見られた。

(18) 「ワッハッハッハッハ」

と背後で【大きな笑い】が起った。麦藁帽の男であった。(何143頁)

- (19) {以下は作品の冒頭の文} 私は【会場】の片隅で、もう半日以上も坐りつづけていた。{中略}『大学入試展』の会場は、市の中心部の百貨店四階で開催されていた。
(何264頁)

4. 格成分の意味から生じる予測

4.1 具体性に乏しい表現

一口に具体性に乏しい表現といっても、以下で見るように、そうした表現は多岐にわたっている。それを一つの枠でくくることはきわめて困難であるが、おおまかな傾向を考えると、意味的には概括的または類的な把握を表し、形式的には「という」を前につけて内容の補填ができるような名詞、といったことはいえるように思う。つまりこれまで見てきた省略、不定語、指示語、属性主を欠く表現と同様、箱だけあって中身がよくわからない

⁴ 以下で見る4.1.1.1「知覚的内容」のように、「という」がつかないものもある。そのようなものであっても、概括的または類的な把握を表し、内容の補填ができるような名詞であることには変わりない。

表現という点で共通するのである。そうした表現が出てきたとき、その表現の前に「どんな」をつけて読み手は理解し、「どんな」の具体的な内容を後続文に求めることになる。

本節では、具体性に乏しい表現を、①人の知覚的、または感覚・感情的認識を表す認識的内容、②人の思考内容や伝達内容など、言語によって媒介される産出的内容、③出来事や行為など、現実世界に起こる事柄を表す事態的内容、④事物や人物、組織・機関などの内実を表す実体的内容、⑤性質や課題、評価、関係、状況、程度など、論理的、抽象的な内容を内在させる属性的内容、の五つに分けて見ていくことにする。

4.1.1 認識的内容

4.1.1.1 知覚的内容

知覚的内容を広く解釈すると、描写文に出てくる事物全般ということになるが、そうすると知覚的内容が広がりすぎてしまうので、ここでは、光景、姿、音など、形式から知覚対象であることがはっきりしているもの、映像、写真など、知覚的内容を内在させているものに限ってみていくことにする。

まず、形式から知覚対象がはっきりしているものであるが、やはり視覚的なものが圧倒的に多い。「風景」「情景」「光景」「場面」といった状況的なもの、「姿」「風貌」といった人の外見に関わるものが見られる。

(20) 先生は戦争している兵隊よりも【もっとひどい場面】を見た。皆には想像出来ないだろうが、死体ばかり転がっている中を、知らない男とたった二人で歩き廻ったんだよ。(何 146 頁)

(21) 【長兄の姿】が現われた。シャツ一枚で、片手にビール瓶を持ち、まず異状なさそうであった。(何 23 頁)

また、知覚的内容を内在させているものは、「写真」「絵」「図」「表」「番組」「映像」などがある。

(22) 実際【この種のカメラを積んだアメリカの人工衛星スカイラブがフロリダのマックディール空軍基地を撮った写真】が数年前公表されている。そこには今にも滑走路を飛び立とうとしている四機が鮮明に捉えられている。(世 884 頁)

4.1.1.2 感覚・感情的内容

知覚的内容を外界認識的内容とすると、感情的内容は内面認識的内容になる。「感動」「不安」「危機感」「憂慮」「信頼」「怖れ」など、心の動きに関わる名詞がこうした予測を引き起こす。

(23) それよりも、【先刻からの不安】が次第に【怖れ】に変わって来始めた。何故、僕たちだけがこうして無事なのだろうか。(何 144 頁)

4.1.2 産出的内容

4.1.2.1 思考内容

思考内容をあらわす名詞にはさまざまなものがあるが、ここではそれを三つに分けて考えようと思う。一つ目は、小説でしばしば出てくる頭の中に浮かび上がってくるイメージを表すもの、二つ目は、論説文でよく用いられる論理的な思考を表すもの、三つ目は、内的な思考が態度に表れるものである。

まず、頭の中に浮かび上がってくるイメージであるが、「夢」「幻覚」「記憶」「ひらめき」といったものの他、「過ぎ去った日のこと」「遠い夜のこと」「死者が辿って行く道のこと」「ミツのこと」など、「～のこと」で表されるものが多い(宮田 1999a)。

(24) 【その暑い日の一日の記憶】は不思議にはっきり残っている。砂原にはライオン歯磨の大きな立看板があり、鉄橋の方を時々、汽車が轟と通って行った。(何 29 頁)

(25) 私はふと【市川のこと】を想った。性に奔放な彼のことが羨ましかった。(何 278 頁)

それから、論理的な思考を表すものであるが、「考え」「考え方」「論法」「計算(=見通し)」「洞察」「理念」などが挙げられる。

(26) 二〇世紀を通じて支配的であった都市計画の理念は、【ル・コルビュジェの「輝ける都市」に代表される考え方】であった。(中略)ル・コルビュジェの「輝ける都市」は、建築素材として、コンクリート、鉄鋼、ガラス、大理石を使って、伝統的な建築様式にとらわれない自由な建築群と、近代的なデザインと機能性とをあわせもつ自動車群れとが巧みに調和した、いわば、芸術作品としての都市を計画したのであった。(世 975 頁)

さらに、内的な思考が、「意見」「批判」「反論」「決意」「覚悟」といった態度として現れるものもある。

(27) 【内村の教会批判】はこの頃から顕著となる。教会の主流が日露戦争に協力したあとで、内村はこう記した。

「戦争開けて盛んに戦争を謳歌し、平和成りて直ちに平和協会を興す。これ今日のキリスト信者のなすところなり。言ありいわく、『生ける魚は水流に逆らいて遊ぎ、死せる魚は水流とともに流る』と。かつて一回も世に逆らいしことなく、常にその潮流にしたがいて往来するわが国今日のキリスト信者は、死せる魚の類にあらずして何ぞや」(世 873 頁)

4.1.2.2 伝達内容

伝達内容については、現実の場面で発話された話しことばと、記録されたことばである書きことばとに分けて見ていくことにする。まず、話しことばであるが、「話」「ことば」「声」「電話」「説明」「談話」「謹話」「証言」「自白」「判決」「宣言」「提唱」「叫び」「命令」

などが挙げられる。

(28) {学生たちに} 私は、【中島健蔵さんから聞いた思い出話】を伝える。三木清は、疥癬で、栄養失調と不眠とで死んだらしい。三木清が疥癬になったのは、疥癬の病気をもち囚人の毛布を三木清にあてがったうたがいがあある。それは、巧妙にしくんだ殺人である。九月二六日朝、看守が三木の独房の扉をひらいたとき、三木は木のかたい寝台から下へ落ちて、床の上で死んでいた。干物のように。(世 764 頁)

一方、書きことばであるが、「文字」「文章」「ことば」「記録」「報道」「論説」「新聞」「記事」「連載」「特集」「報告書」「書物」「著書」「くだり」「一節」「法規」といった表現によって、予測が誘発されている。

(29) ついでに学生たちに、その同じ面で、【奇妙な小さな記事】があることを教える。見出しは『炭管』初起訴 田中、木曾、原口氏とある。炭鉱国家管理に反対のため、北九州の炭鉱主たちが、前法務政務次官田中角栄民自党代議士に、百万円を贈賄したことが発覚、起訴されたという記事である。(世 766 頁)

4.1.3 事態の内容

4.1.3.1 出来事の内容

「事実」「現実」「事件」「事故」「裁判」「経過」「過程」「争い」「いさかい」などといった、出来事を概括的に把握する一連の表現も、格成分の予測を引き起こしうる。こうした出来事にはその内実が必要となるからである。

(30) このことを象徴的に表わしているのが、西淀川地区の公害裁判である。{中略} 西淀川公害裁判は、自動車沿道における大気汚染公害によって健康被害を受けた人々が、一〇企業と国・道路公団を被告として提訴したものである。(世 972 頁)

4.1.3.2 行為の内容

出来事は、主体がはっきりしないか、または複数の主体によって引き起こされるのに対し、行為は、事態を引き起こす主体がはっきりしているという点で違いはあるが、事態の内実を問えるという点で両者は共通している。格成分の予測を喚起する名詞には、「行動」「動き」「破壊」「治療」「事業」といった目に見える行為の他、「手段」「方法」「方策」「手がかり」「～(し)方」「目的」「扱い」などの手段、「態度」「差別」「努力」「戦い」「責任」のような心的態度を伴う行為などがある。

(31) 眼の前が少しずつ白みはじめたとき、私ははじめて【本能的な行動】に移っていた。私は機械と、回転をやめたベルトと、押し潰された屋根の下で、出口を求めて這い回った。(何 279 頁)

(32) 人類においてただひとりの核の被爆者である日本は広島と長崎をオラドウル(=戦禍を当時のままとどめている村)として保存する機会は逸しました。しかし、まだ【保

存の手段】は残されています。核実験をおこなう大国や、核武装に接近する国々にむかって、それは平和にそむいて平和から遠ざかる致命的な道だとまずたゆまず宣言することです。(世 847 頁)

- (33) 【大国の核兵器の保有は】さらに核保有国の内部においても【著しい差別】をつくり出す。核戦争の惨害は政府から多少の補助金を受けた程度の民間防衛を以てしては到底防ぎきれものではないから、戦争遂行と国家再建に必要な生き残り要員のための特別の避難と防護を極秘裡に準備しなければならない。(世 892 頁)

4.1.4 実体的内容

4.1.4.1 事物の内容

事物に関しては、必ずしも内容を伴うものではないため、格成分の説明の予測を引き起こさないことのほうが普通である。予測を引き起こすのは、「贈物」「荷箱」「遺品」のように中身にさまざまなものが想定できるもの、「家」「壺」「水甕」のように、実際に目にした人による具体的な描写がないとイメージが湧きにくいものに限られる。特に後者については、「お化けのような顔」「カキツバタの狂い咲き」「焦点距離六〇〇cmのレンズ」「〈理想的勉強部屋〉のセット」「和夫がこれまで見たこともない、珍しい蛆」など、比喩や象徴的表現を使って、当該の格成分に読み手の注意が向くように工夫されているものが多い。

- (34) 今日、教会堂のかたわらの小さい記念館には【惨劇のあと教会堂のなかで発見された子供たちの遺品】が展示されてあります。小さい学校カバン、ひきちぎれたノートブック、おさないスケッチ帖、自転車、インク壺、鉛筆……。 (世 840 頁)
- (35) 間口は狭いが奥が深い造りになっていて、中庭の梅の古木の根本に【伊部焼の水甕】が据えてあった。この水甕は、私の学生のころからその場所に置き放しにされていた。高さ四尺の朱色に近い、ねっとりとした土肌の水で、陶印は竈^{かまど}で無造作に彫った縦横三本づつの交叉線であった。(何 40 頁)
- (36) 広島町の町が爆撃されて間もないころ、私は福山市近郊の知人のうちで【カキツバタの狂い咲き】を見た。たった一輪、紫色に咲いていた。(何 38 頁)

4.1.4.2 人物の内容

事物と同様、人物においても、「人々の群れ」「外国からの留学生たち」「(メンバー)構成」「兵隊たち」のように、複数性がある中身にさまざまな人物が想定できるもの、「ラメルディング将軍」「ひとりの女」「怪我人」「疎開仲間の木内君」のように、実際に会った人による具体的な描写がないとイメージが湧きにくいものに限られる。(37)は前者の例、(38)は後者の例である。

- (37) さらに、【生産者集団や生活者集団からさえもはみ出た人々】がたくさんおります。未組織労働者、身体障害者、老人、もの言わぬ主婦等々、この数はたいへん多いので

す。(世 806 頁)

(38) 私たちの恩師に、【T先生という女先生】がいた。当時二十四、五歳で、長崎市内の上町にあるK寺のお嬢さんだった。N高女の先輩で、金色の産毛が頬から耳たぶにかけて光る、色の白い、美しい先生だった。(何 370 頁)

4.1.4.3 組織・機関の内容

さらに、「団体」「政党」「施設」「大学」などの組織・機関においても、事物や人物と同様の区別が見られる。(39)はさまざまな組織が想定できるもの、(40)は実際に行ったことがある者でないイメージが湧きにくいものである。

(39) 知事は日常、【何十、何百の団体】と接触します。

経済団体、労働団体、三師会、農漁協、福祉施設団体等々の職業団体が典型的ですが、近年はこうした既成の集団とは別に、住民運動、消費者運動、各種のサークル、教育・文化・スポーツ団体、宗教団体など、防犯、消防、交通安全団体など、まことに多種多様な組織が生まれて、既成の団体とは異った行動を展開するようになりました。(世 805 頁)

(40) 昨年四月から、【ある地方の国立大学】で教えることになった。大学のキャンパスは、市の中心から十数キロ離れたところであって、松林に囲まれた、自然のゆたかな環境のなかに置かれている。学部の同僚たちも、長期的視点に立って、ゆっくりしたペースで研究をつづけている方々が多く、私にとってこの上もないような研究環境と生活環境とを提供してもらっているという感じである。(世 965 頁)

(40)のような施設の例は、今回の調査では現れなかった場所の内容につながっていく。さらに調査を広げて場所の内容の予測の例が採取できれば、場所の内容もこの実体的内容の中に立項する必要が出てくると考えられる。

4.1.5 属性的内容

4.1.5.1 内在的内容

内在的内容は、実体的内容に内在している性質を指している。論説文に主に出現し、描写文ではほとんど見られない。「性格」「体質」「在り方」「仕組み」「資格」などがある。

(41) ここで政治システムの安定というのは、自民党の単独支配が安定して続いているということとほとんど同じだが、完全に同じ内容ではない。より一般的に言って、【与党が与党であることによって与党であり続ける仕組み】のことである。

こんにち日本の選挙は、政策をえらぶという次元で行われるものではない。有権者個人や地元の利益、あるいは所属する組織の利益を、誰がどのくらいもたらしてくれるのかということに選択の基準を置く人々が多数にのぼる。その利益も、抽象的な利益では決してなく、目に見えるもの、もっとあけすけに言えば金銭に換算できる具体

的な利益でなければならない。その実体は、税または国・自治体の債務として集められた金を、こっちにいくら寄越すのかという要求である。

そのような要求に応えることができるのは、政府の役人を指揮監督、あるいは役人に懇願できる与党の政治家たちであると信じられている。したがって、与党の政治家は与党に籍を置くことで集票が容易となり、選挙結果はいつも与党の過半数確保となる。(世 913 頁)

4.1.5.2 課題的内容

課題的内容は、ある話題をめぐっての議論のポイントを指している。「問題 (=課題)」「論点」「焦点」「論理」「意味 (=内容)」などがここに入る。

(42) 私は、立ち入って論じるつもりはないといいながら、思わずいくつかの疑問や注文を書き連ねてしまったが、それというもの【一つの中心的な論点】が投げこまれたからである。それが、池に投げ込まれた一つの石のように、次から次に問題の波紋を拡げていくのである。その一石とは「増税」に他ならない。(世 828 頁)

4.1.5.3 評価的内容

評価的内容は、ある実体的内容の肯定的側面、否定的側面を表している。肯定的側面としては、「効果」「役割」「意味 (=意義)」などが、否定的側面としては「欠陥」「悪」「虚構」「ツケ」「問題 (=難点)」などが挙げられる。

(43) もちろんこれまでも、【さまざまな政治悪】が露呈された。いわく政財官の神聖ならざる三位一体、いわく与党自民党の金権的、汚職的体質、それに対応する国民の側のいわゆるムシリ・タカリ気質、そしてこのような悪は、時として野党にまで伝染して、既存の政党政治の枠内では解決不可能ではないかとさえ思わせた。(世 825 頁)

4.1.5.4 関係的内容

関係的内容は、因果関係を中心とした関係に関わる内容のことである。「理由」「原因」「動機」「要因」「結果」などがここに含まれる。

(44) それはともかく、大蔵省OBの庭山慶太郎氏が【今回の財政危機の原因】を明快に指摘している。第一に、政府は昭和四〇年の不況にたいして戦後最初の国債を発行したが、これはよかった。ところが四一年から四五年にかけてむしろ異常な好景氣を迎えたのに、国債を発行し続けた。これが最初の重大な失敗であった。景氣を回復するために国債を発行したのだから、景氣が回復すれば国債の発行を中止すべきだったのである。第二に対外通貨の問題、つまり政府は円の切り上げに踏切りがつかなかった。第三に、列島改造ブームに代表される大インフレ政策にさらに石油ショックが追打ちをかけた。(世 827 頁)

4.1.5.5 状況的内容

状況的内容は、ある実体的内容に付随するもので、とくにそれを背後で支えている情勢を指す。「傾向」「時代」「ありよう」「状況」「実状」「立場」「様相」「兆候」などがある。

(45) この点を理解するには、[当時の高等教育の実情]を知る必要がある。講義の多くは外人教師により、外国語で行なわれたのである。 (世 868 頁)

4.1.5.6 程度的内容

程度的内容は、ある実体的内容の程度的側面に着目する。「利益」「度合い」「年齢」「発展段階」など数値化ないしは量化できるもののみ現れる。

(46) そして私は【彼女たちの年齢】を考えて、愕然とする。まだ二十歳にならない少女たち、1957、8年生まれが大半であろう。 (世 763 頁)

4.2 難解な表現

前節で見た「具体性に乏しい表現」は底の名詞の「どんな」に当たる部分を後続文に求める予測であったが、本節以降で見る「難解な表現」「比喩性を帯びた表現」「特定を必要とする表現」は当該の表現そのものが何なのか、または誰なのかを見ていく表現である。

そのうち、難解な表現は、表現そのものものが耳慣れない難解なものである。読み手はそうした難解な表現が以降の文章の中で解説されることを期待し、後続文を読み進めていくことになる。こうした予測は、実際の用例ではもっぱら論説文に現れ、「多元社会」「経済学制度化」「デタレンス」「レストレイント」「ヘゲモニー」「教育刷新委員会」「勅令」「大御心おんみこころ」「自動車の社会的費用」「立憲主義と法治主義の技術」などが見られた。

(47) かつてのイタリア共産党の理論家アントニオ・グラムシならば、現在の政治状況を【ヘゲモニー】の麻痺状況と呼ぶと思う。ヘゲモニーとは、これまでの私の言葉でいえば合意を作り出す能力——犠牲を求めて説得する能力である。 (世 832 頁)

4.3 比喩性を帯びた表現

比喩性を帯びた表現は、「ような」「似た」などの比喩指標に基づく「白いもやに似たもの」「紐のようなもの」や、名詞とそれを修飾する部分の組み合わせによって比喩であることがわかる「遠い民主主義」「自分の星」、さらには、当該の文脈の中におかれて初めて比喩であることがわかる(48)のようなものがある。いずれもたとえるもの(喩詞)だけが言語化され、たとえられるもの(被喩詞)を後続文の中に求めていくことになる。

(48) {戦時中、学徒動員された軍需工場の中で}

「おれは【別荘】に行くけんな」

市川はどす黒い唇でそう言い、そしてあとは判ったな、と鋭い眼が私に注がれている

た。

「はい」

私は素直に答えた。しかし市川は、その返答を確かめようとししないで、ましらのように床を這って出て行った。

別荘は、倉庫にある。そこには空の木樽がうす高く積み、そのなかは人ひとりが充分しゃがんでいられるほどである。〔つまり、別荘とは作業をサボる場所を表している〕 (何 276 頁)

4.4 特定を必要とする表現

特定を必要とする表現の場合、当該の人物に対する具体的記述があった後、その問題となっている人が誰なのか、その人物の名前を特定させるものが多い。あくまでも「誰」なのかを予測するのであって、「どんな人」なのかを具体的に予測するのではない。それが、具体性に乏しい表現との違いである。「原子爆弾の被害を受けた怪我人の一人」「カーキ色の軍服」「和夫の見覚えのある顔」などの例が見られた。

(49) 納戸の方に【口笛を吹いている者】がおる。それは予備隊休暇の三男らしい。 (何 66 頁)

人物以外で使われる場合は、(50)のように、事物の一側面に着目した象徴的なものであることが多い。こうした例は、前節に挙げた「白いもやに似たもの」「紐のようなもの」のような比喩性を帯びた表現につながっていく。

(50) 塵捨場の隅から、急に【白いもの】が飛び出し、一直線に庭を横切り、野菜畑の方に駆けてゆく。多分、猫だろう。 (何 244 頁)

5. 焦点化による予測力の強化

4章では格成分を構成している名詞の意味によって予測のタイプを分類し考察した。しかし現実には、格成分を構成する名詞の意味だけで予測が引き起こされているのではなく、その名詞を修飾する修飾成分、さらにはその格成分がおかれている文そのものの構文的性格によって、読み手の予測が強化されていることが多い。修飾成分がつくことによって、また、文の構文的性格によって、当該の格成分が焦点化されるのである。

(6) この種の大型車には【重大な欠陥】がある。燃費が極端に悪いのである。

すでに見たこの(6)の例で言うと、評価的内容を持つ「欠陥」という名詞が予測を引き起こす主要因になっているのは言うまでもないが、「重大な」という形容詞がつくことによってこの格成分に焦点が当たっている。また、当該の文が「～がある」という存在を表す構文になっていることで、ガ格の格成分の存在に焦点が当たるようになる。この二つの要因によって、読み手は、欠陥の内容を後続文に求めていく予測の意識がより強化されるので

ある。予測の力を強化するこの二つの要因について以下で詳しく見てみたい。

5.1 修飾成分の付加による予測力の強化

予測の力を強める修飾成分には、いくつかのタイプが考えられる。一つ目は、(6)の「重大な」に見られるような、名詞の意味を強めるものである。それは主に程度や評価の形容詞によって表される。すでに見た例でいえば、(20)の「もっとひどい場面」の「もっとひどい」、(29)の「奇妙な小さな記事」の「奇妙な」、(33)の「著しい差別」の「著しい」などに現れている。

二つ目は、単数を表す「ある」「一つの」「一人の」や、複数を表す「いくつかの」「いろいろな」「さまざまな」のような、不定性を高めるものである。このような修飾語を名詞の前に置くことで、その名詞が概括的な認識を表していることをより鮮明にするのである。すでに見た例では、(40)の「ある地方の国立大学」の「ある」、(42)の「一つの中心的な論点」の「一つの」、(43)の「さまざまな政治悪」の「さまざまな」などがそれに相当する。

三つ目は、長い連体修飾節である。長い連体修飾節によって、当該の名詞に詳しい説明が付されている場合、書き手がそれだけその名詞の内容に注目していることを示していることが多い。つまり、長い連体修飾節が当該の格成分を焦点化するのに役立っているのである。すでに挙げた例でいえば、(22)の「この種のカメラを積んだアメリカの人工衛星スカイラブがフロリダのマックディル空軍基地を撮った写真」や、(26)の「ル・コルビュジェの「輝ける都市」に代表される考え方」、(34)の「惨劇のあと教会堂のなかで発見された子供たちの遺品」、(41)の「与党が与党であることによって与党であり続ける仕組み」などがそれに当たると考えられる。

5.2 構文を利用した予測力の強化

当該の文において、どの格成分に焦点が当たるかは、その文の述語のタイプによって異なる。ガ格に焦点が当たる述語は典型的には存在、出現を表す述語である。存在を表すものは、(29)の「記事がある」、(37)の「人々がおる」、(38)の「先生がいる」、(49)の「口笛を吹いている者がおる」などの「ある」「おる」「いる」といった、存在を表す典型的な動詞に加え、(24)の「記憶が残っている」、(32)の「手段が残されている」、(34)の「遺品が展示されてある」、(35)の「水壘が据えてある」などもこのタイプと考えるとよいだろう。

出現を表す述語は(21)の「姿が現れる」の「現れる」という典型的な動詞に加え、(22)の「写真が公表される」、(27)の「批判が顕著となる」、(42)の「論点が投げ込まれる」、(43)の「政治悪が露呈される」、(50)の「白いものが飛び出す」なども出現を表すと考えられるだろう。

ヲ格に焦点が当たる述語は、(20)の「場面を見る」、(36)の「狂い咲きを見る」、(45)の「実情を知る」のような知覚動詞、(25)の「市川のことを想う」、(46)の「年齢を考える」のよ

うな思考動詞、(28)の「思い出話を伝える」、(44)「原因を指摘する」のような伝達動詞、さらには(33)の「差別を作り出す」のような生産動詞などが考えられる。

二格に焦点が当たる述語は、(23)の「怖れに変わる」、(31)の「行動に移る」のような変化動詞の結果の部分がその典型である。

これらのガ格、ヲ格、二格に共通している点は、いずれも読み手に対して新たな対象として提示されている格成分だということである。そうした格成分が新出の対象として提示された結果、そこに焦点が当たり、予測を強化することにつながっていくのである。

名詞述語文においても「AはBである」のBの部分が新出の対象として提示されているので、その部分が焦点化され、予測を強化していることが多い。その典型が以下のような「～のが／のは…だ」という分裂文である。

(30) このことを象徴的に表わしているのが、【西淀川地区の公害裁判】である。〔中略〕
西淀川公害裁判は、自動車沿道における大気汚染公害によって健康被害を受けた人々が、一〇企業と国・道路公団を被告として提訴したものである。 (世 972 頁)

6. おわりに

これまで述べてきたことを以下にまとめておく。格成分の説明の予測は概略、格成分の形態から義務的に生じる予測、格成分の意味から生じる予測の二つに分けることができる。前者は以下の①～④のように、後者は⑤～⑧のようにそれぞれ整理することができる。

- ①思考・伝達動詞に典型的に見られるように、必須格成分が省略されているとき。
- ②格成分に「何」「誰」「どこ」「いつ」「どのような～」といった不定語がくるとき。
- ③格成分に、文脈指示の指示語が来て、なおかつそれが先行文脈と照応していないとき。
- ④格成分に、ノ格を必要とし、なおかつそのノ格を欠く名詞がくるとき。
- ⑤格成分に、概括的または類的な把握を表す、具体性に乏しい表現がくるとき。
- ⑥格成分に、読み手にとってなじみがない難解な表現が来るとき。
- ⑦格成分に、たとえられるものを欠いた比喩性を帯びた表現が来るとき。
- ⑧格成分に、誰なのか、または何なのか、特定を必要とする表現が来るとき。

また、後者、すなわち⑤～⑧に関して、当該の名詞の意味を強めたり、不定性を高めたりするような修飾語がついたり、当該の文が、存在文や出現文、分裂文など、ある格成分を焦点化するような構文を取ることで、読み手の予測に対する意識が強化されることがある。

資料

大江健三郎編 日本ベンクラブ選 (1983)『何とも知れない未来に』集英社文庫
『世界』主要論文選編集委員会編 (1995)『「世界」主要論文選』岩波書店

参考文献

- 庵功雄(1995)「語彙の意味に基づく結束性について —名詞の項構造との関連から—」『現代日本語研究』第2号 大阪大学現代日本語学講座
- (1997)『日本語のテキストの結束性の研究 —指示表現と名詞の機能を中心に—』未公開博士論文 大阪大学
- 石黒圭(1996)「予測の読み —連文論への一試論—」『表現研究』第64号
- (1998a)「理由の予測 —予測の読みの一側面—」『日本語教育』第96号
- (1998b)「逆接の予測 —予測の読みの一側面—」『早稲田日本語研究』第6号 早稲田大学国語学会
- (1999)「並立の予測 —予測の読みの一側面—」『国語学研究と資料』第23号 早稲田大学国語学研究と資料の会
- (2001)「句の説明の予測 —予測の読みの一側面—」『一橋論叢』第126巻第3号
- 林四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- 宮田公治(1999a)「名詞+ノコト」の機能分析」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44輯 第3分冊
- (1999b)「発話内容を構成する名詞の意味類型と序列関係」森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』明治書院

